２１世紀の日本のかたち（１１）

調和的都市化（Harmonious Urbanization）
--- 国連ハビタット（NGO）・世界居住学会南京集会に参加して ---

戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

１．はじめに

私は、2008 年 11 月 3ー7 日の間、中国、南京市で行われた国連ハビタットの一つの集会に出席致しました。

開催期間中、南京市の大きな会場では、中国のこの地方の都市の歴史と未来を示す展示が大々的になされ、大小の会議場で、主題ー「Harmonious Urbanization」についていくつもの議論が展開されました。

私の参加したハビタットＮＧＯ“ＷＳＥ(World Society of EKISTICS：世界居住学会)”は、1970 年にギリシャ人、デイノス・ドクシアデスが呼掛け、歴史家のトインビー、建築家のバックミンスターフラー、社会学者のマーガレット・ミード、都市地理学のジャン・ゴットマン、日本人では磯村英一らが参加して設立されました。地球儀を真ん中において、世界の人間居住の未来を学際的に研究することを目的としています。

ＷＳＥは、隔年で地球のあちこち、ヨーロッパやアジアの都市で会議を行い、一昨年は日本の滋賀県彦根市で開催されました。今回は、国連ハビタットに合わせて中国の南京市で行われることになったものです。

会議の主題「Harmonious Urbanization」は中国において現在、独特な意味を持っています。

２．中国における調和的都市化

現在、13 億人の人口を持つ中国の都市化は激しいものがあります。

2030 年において、南京市から上海に至る長江沿い 300km と、上海市から寧波市までの杭州湾沿い 260km の、東京～大阪間ほどの範囲に総計約２億人（2002 年人口：6,550 万人）が居住するであろうと私どもの研究所では推計しています。（図１）

億単位の人口を吸収するメガロポリスとして、この長江メガロポリスの他に、北京市、天津市、河北省の人口連担地域があり、これに広東省の巨大人口集積地帯が加わっています。（図２、図３）

中国は都市部における一人っ子政策の徹底化により、やがて人口増に急ブレーキがかかると予想されますが、現在は依然として人口は増え続けており、21 世紀前半は、この巨大人口を背景に農村から都市への人口流入に歯止めがかからず、都市化、巨大都市化（メトロポリス）、巨帯都市化（メガロポリス）が急速に進んでいます。中国政府はまた、近代化、都市化を積極的に推進し、外国資本を大きく受入れて、農業から工業化、第三次産

業化、途上国から先進国への方向を明確にしています。

今回の中国行きは、私には12年ぶりであり、上海の変貌ぶりには驚かされました。中心部の金融中心地区には、超高層ビルが林立し、これに最近（10月25日）、日本の森ビルが建設した、栓抜きの形をした地上101階、高さ492mの「上海環球金融中心」（上海ワールドフィナンシャルセンター）が加わりました。高速自動車網に加え、地下鉄の建設も急ピッチで、2010年開催予定の上海万国博覧会（テーマ：より良い都市、より良い生活）までに、あと数本造りあげる勢いです。上海市内と上海空港間は、リニアモーターカーが時速400km、６分間でつないでいます。上海は超スピード、超高層の国際先端都市というほかありません。

これと対照的に、超高層の足回りには前近代が渦巻いています。

上海市の人口（2005年）は、いわゆる戸籍人口1,360万人、非戸籍人口約600万人と言われています。この二種の人びとの間には、住む、働く場に大きな格差があるようです。上海駅の地下通路や周辺部には、大きな袋を抱えた人々が大勢で何かを叫んでいました。

中国の急速な近代都市化は、経済のグローバル化の中で、中国政府が中国への市場経済への転換に舵をきり、外国からの資本、物、情報、人を受入れています。日本人も現在10万人が住んでおり、私の知人も上海スピードで忙しく働いています。都会の流行も都市のデザインもどんどん世界中を取込んで、歴史や伝統もひとまず横において、という風です。

大きく行き過ぎても不具合があれば修正すれば良いというのでしょう。ストックよりもフローで経済の活性化を図るかのようです。伝統的な低層の中国風住居をどんどん壊して建てる高層住宅の寿命も長いものとは思えないのですが。

３．南京集会

南京市（人口600万人）は内陸にあるためか上海よりも都市化のスピードが遅く、古都の雰囲気をいまだもっていると感じられました。

会議の合間に、平坦な南京市街の中でぽっこりと高い、南京市鐘山風景区にある秋の世界文化遺産、明・清朝の皇帝陵墓群のある明孝陵と、孫文の墓、中山陵にも登りました。市内には城壁が残っており、この中に船で遊覧できる水路の街並みを、中国側の配慮でお茶を飲みながら楽しむことができました。

そして日本と関わりの深い「侵華日軍南京大虐殺偶難同胞紀念館」を訪れました。

本館（1985年、設計：斉康）は江東門集団虐殺「万人抗」遺跡の上に建てられており、日本軍による南京虐殺の生なましい記録が克明に展示されておりました。新館（2007年、設計：何鏡堂）は「平和の舟」と名付けられ「化剣為犁」（戦争をやめて平和となる）を造形化した建築と展示であり、改めて戦争の愚と日中の友好を願う気持ちを強くしました。私の早稲田大学教師時代、研究室にやってきた中国人留学生、この若い友人達が国境を越えて、今、活躍していることは、まことに頼もしいことです。

さて、世界居住学会（ＷＳＥ）の議論－調和的都市化、人間居住ですが、様ざまな論点があり、それぞれの国の実情と取組みについて報告し合ったのですが、やはり中国側が直面している「都市化」の課題の大きさに圧倒されたといったところです。また、地球温暖化問題、世界金融危機問題、多方面なグローバル化の問題について話合いました。

会議開催中にアメリカの次期大統領にオバマ氏

が選ばれたニュースも飛込んできました。

これからの地球の人間居住は問題山積、宿題一杯、といったところです。

ＷＳＥの次回開催は、トルコのイスタンブールで行うことを確認し、地球における人間居住を包括的に行う、研究、教育のプログラムを試案的につくってみようということになりました。

今回、中国側は精華大学（北京）と、東南大学（南京）が多くの労力をさいて準備してくれましたが、これに応えて、日本側も早稲田などいくつかの大学、研究所などをベースに交流のネットワークを広げ、強めたいものです。この中で「アジアにおける調和的人間居住」といったものと関連させて、21 世紀の日本のかたちを改めて探りたいと考えています。

（2008 年 11 月 15 日）

会議出席者との記念写真

主な出席者

日本	戸沼幸市、長島孝一、長島キャサリン、後藤春彦、関口信行、趙城埼
中国	精華大学：呉良鏞、毛其智、武廷海、呉唯佳、他 南京大学：王建国、董衛、他
その他	ギリシャ：　D.Agrafiotis　Panayis Psomopoulon トルコ：　Rusen Keles コロンビア：　Eduardo Barajas カナダ：　Edward A.Leman　William Michelson オーストリア：　John R.Minnery　A.Rahmaan パキスタン：　M.A.Mushal イタリア：　L.Musara ニュージーランド：Barry Rae エチオピア：　Wubshet Berhana　他

図１　日本と中国の比較

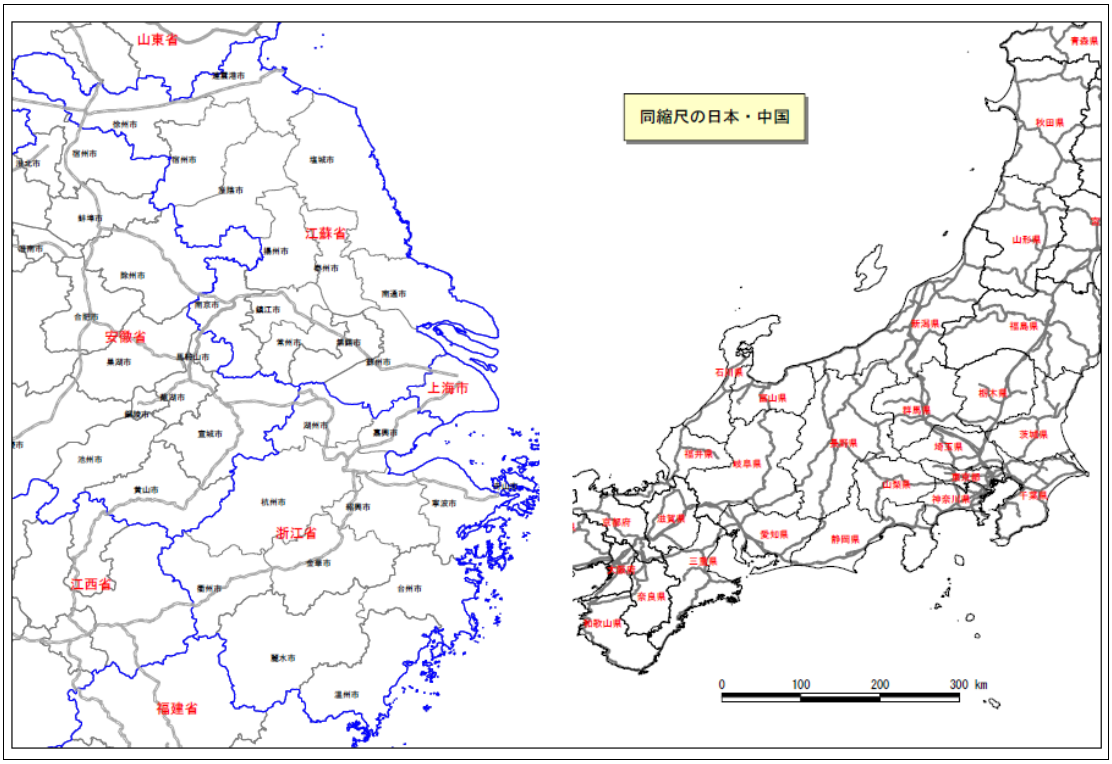
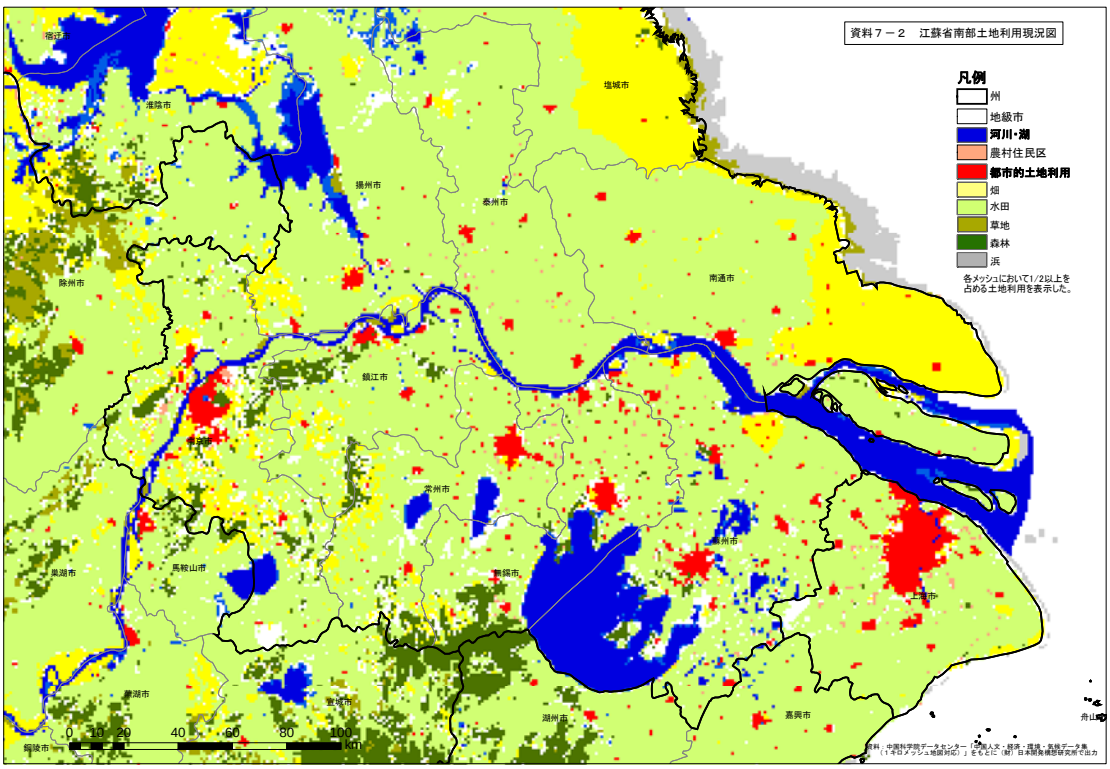
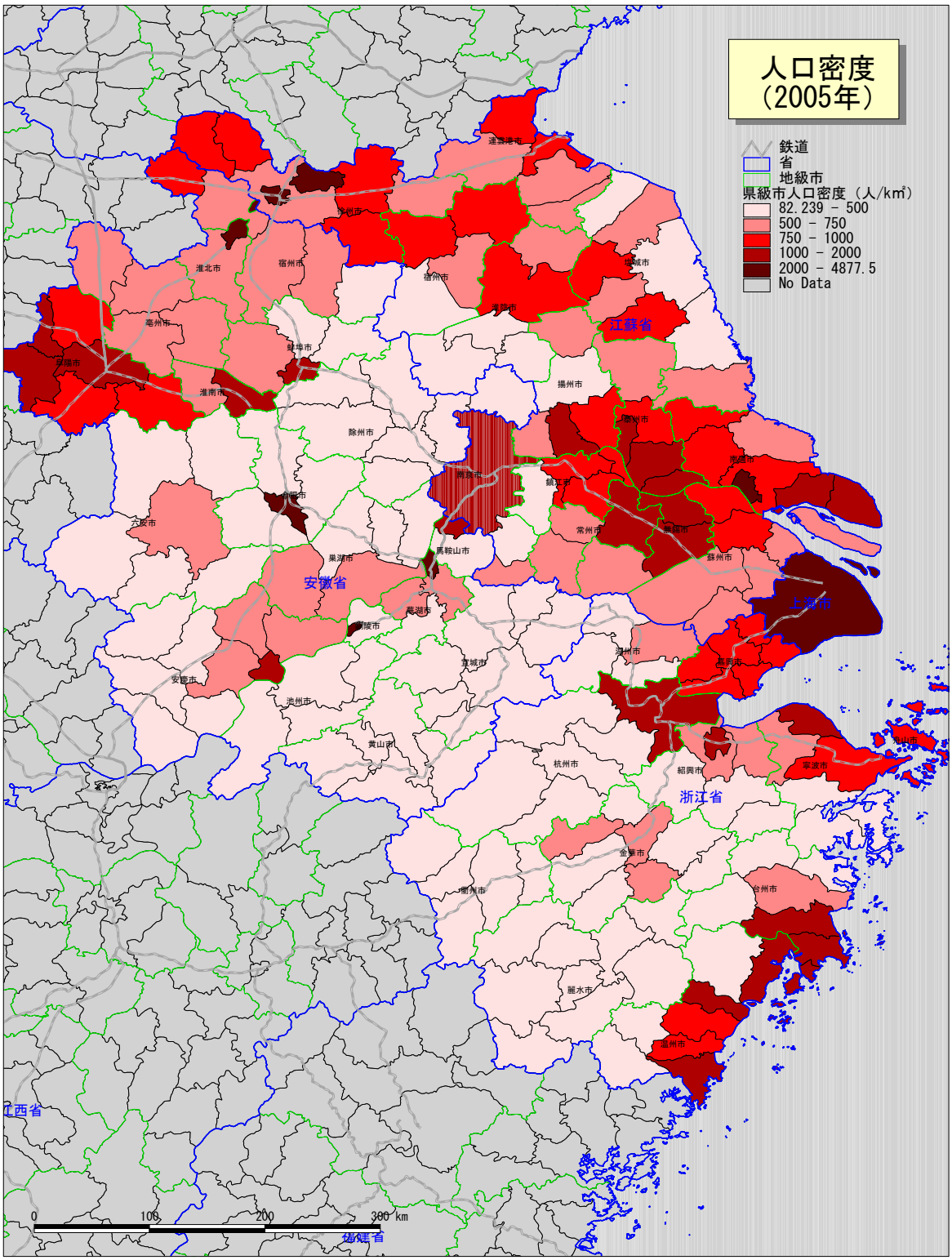


図２　長江デルタ（江蘇州南部）の土地利用現況



資料：「中国人文・経済・環境・気候データ集」中国科学院資源環境科学センター－2005 年 12 月班－より財団法人日本開発構想研究所作成

図３　長江流域及びその周辺の人口密度



資料：「中国城市統計年報 2006 年」中国国家統計局城市社会経済調査司（編）より財団法人日本開発構想研究所作成